

ちんじゅの木々通信



2021
臨時夏号

Theme:
ちんじゅの森の木々
(スタッフ紹介)

繰り返しの中で 自分を生かす

森村 衣美



前代表の中尾伊早子さんが、平成5年の伊勢神宮の式年遷宮をきっかけに、学校で教わらない日本の森の文化をわかりやすく多くの人に伝えていきたいという思いから、2001年に「日本がもっと好きになる」をテーマに設立したのがNPOちんじゅの森です。

明治神宮の森の中でのコンサート、風土に合った暮らしの知恵を語り継ぐ民話語り、日本神話をエンターテインメントにした舞台古夜(イニシエナイト)、アニメ宗教学講座、ご遷宮フォーラム等…、日本各地の方々からの多くのご賛同とともにNPOちんじゅの森の20年の活動がありました。

その代表を引き継いだ私自身は、神社に奉職する神職の家に育つも、それらしく育たず、振り返れば通った幼稚園はキリスト教で神様といえばイエス様、聖書のお話を聞くのが大好きで、なんてイエス様は優しいのかと、聖書の時間をとても楽しみにしていたのをよく覚えています。神社はお参りするところでありましたが、そこにおわす神様について、どうやら日本には八百万の神様がいるようだとかわかったのは、かなり年齢を重ねた後でした。大学で神葬祭や神前結婚式をゼミ論卒論で扱って初めて、神道を知ることは日本を知ることだと感じ、日本への興味につながりました。

もっと学びを深めたいと思っている頃、2003年に出会ったのがNPOちんじゅの森です。明治神宮の森が人の手で作られた人工の森であることを知って衝撃を受け、人は自然を壊すだけでなく作ることもできるのだと感動し、なるほど神社は森とセットであることに気がつきました。1300年以上続く伊勢神宮の式年遷宮について、当時ちんじゅの森が開催した8年間にわたるフォーラム企画に参加して多くを学びまし

た。20年に一度、社殿を同じ形のまま新しく造り替える式年遷宮のお祭りは、木を伐り出すことから始まり1万本の檜(ひのき)を用いて社殿を一新します。広大な神宮の森では200年先のご遷宮のために檜が育てられています。古い技術や精神が20年ごとに新しくなって生まれ変わる、永遠の繰り返しのよって続く仕組み。「生き続けなさい」と言われているようで、平成25年に新しくなった社殿にお参りした時には、遠い祖先に挨拶したような不思議な感覚を味わいました。

伝統文化も、今ある自然も、私たちの命も、それらを今につないできたのは「人」だとわかりました。神社の人こそ、ちんじゅの森の活動に取り組まなくてはと直感して代表を引き継ぎ、私自身も神職の資格を取って、神社のお供え物を作る田畑のある場所に2019年に開設し新たな拠点となったのが、ちんじゅの森サロン「ほぐほぐ」です。その資格は、年に2回「ほぐほぐ」の場でお田植えと稲刈りの神事の時のみ活かされ、神職としての心の深化は少ないですが、祖父や曾祖父とのつながりを体感する機会を得た気もしており、私はここで自分を生かしていきます。

大いなる繰り返しの営みの中で、ひと時「つなぎ役」として自分を生かす。先述したご遷宮の祭りは、いつの時代も、人も自然の循環の一部であることを伝えてきたのかもしれない。そのことを思い出すきっかけを、これからの活動でつくなっていききたいと思います。

いつも試行錯誤の日々ですが、新しい出会いがとても嬉しく、今回の通信では改めて現スタッフの紹介をさせていただきます。これからも多様な木々の明るいちんじゅの森と一緒に育ててくださいますよう、みなさまには、引き続きご協力ご支援いただけますよう、心よりお願いいたします。



蚊取り線香が 手に入る前の 虫よけ方法

岡崎 萌生



東京都調布市から鳥取に移住して、この夏で10年。鳥取県東部（砂丘側）の八頭町にある山間の“志子部集落”で約3年間地域おこし協力隊として活動し、その後は鳥取市内のきのこの研究機関に勤務、2017年に志子部集落から6kmほど離れた市谷集落の柿農家（岡崎ファーム）に嫁ぎ、3歳になる娘1人と主人と3人の暮らしを楽しみながら、仕事を続けサラリーマン生活をしています。

地域が元気になるということは、地元の人が笑顔で生き生きと暮らしているということだと感じます。その大切なエッセンスのひとつが“人と人との交流”です。ちんじゅの森では、鳥取と他地域の人を繋ぐ取り組みで笑顔の輪をひろげ、知恵や技術などの暮らしの記録を兼ねた“現地レポート”を鳥取の地からお届けしていきたいと思っています。

今回は、志子部集落の方に「蚊取り線香が手に入らなかった時代はどのように虫よけ対策を行っていたのか。」について教えていただきました。蚊取り線香を使いだした記憶があるのは昭和30年代の終わりの今から約60年前。田んぼを葉たばこづくりの畑に切り替えだした頃とのこと。昭和30年後半までは、この集落では田んぼに養蚕、炭焼きなどを季節に合わせて作業をされていました。田の草を這う（田んぼの除草作業の）ときにはブヨや蚊がたくさん寄ってくるので、虫よけ対策が欠かせなかったそうです。この地域の当時の虫よけは「かっこ」という手作りのもの。古くなった緋の着物やもんぺの木綿を使い、ぐるぐるとおしぼりのようにまいて稲わらできつくくくった布に、火をつけて煙を燻らせることで虫よけになるシンプルな仕組みです。もんぺの腰の紐に「かっこ」を括りつけてぶら下げますが、そのまま火をつけるともんぺが焦げてしまうので、「かっこ」の周りによもぎなどの青草をまきつけます。これまで一度ももんぺを焦がすようなことはなかったそうです。半日ほどもち、作業終わりにまだ

木綿が残っていれば、焼け口を地面にこすりつけて消火し、次の日にまた使うのだそうです。どの家でもだいたいお婆さんが、まとめて作り置いてくれ、朝早くから出るときも、夕暮れ時も、「かっこ持っててにゃブドオ(ブヨ)がかなわんぞ!」と言って持って出たそうです。田んぼを耕してくれる大切な家畜の牛にも虫よけをしていた家もあるようです。灰の入った火鉢の上に鋸くずを入れて、風呂吹きや囲炉裏の残り炭を隅の方に入れて燻らしておく。”燻らせる”という火加減も昔からの知恵と技。原理を知れば、身近で手に入る材料で改良を加えることもでき、災害時などにも役立つかもしれません。かっこは腰にぶら下げなくても木に吊るしたり、ワラがなければ麻ひもなどで代用するのはどうでしょう。鋸くずを燻らせると良い香りが漂ってきそうです。まるで自由研究ですが、そうして試行錯誤をしてモノづくりに没頭する時間も大切なようにも思います。「買わなくても生み出せることの安心感」をもって生きることは今の時代に求められていることのように思います。皆さんもこの夏、ぜひ試してみませんか？



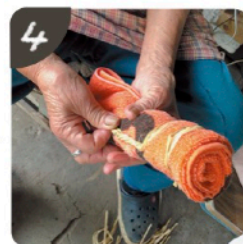
1 木綿のフェイスタオルを3つ折りにし、端からきつく巻く。一気に燃えず燻らすことができる。



2 稲わらを1〜2本とり、株元の太い方で、タオルの上側に1周巻き、止め口を強くねじる。



3 余のわらをタオルに沿わせて下側に伸ばし、タオルと一緒に利き手と反対の手で掴む。



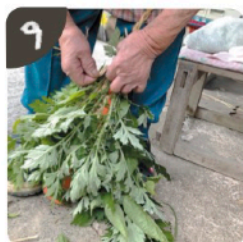
4 ふた巻き目以降もタオルをきつく巻き、止め口が同じ列にならないように手元まで繰り返す。



5 最後まで巻いたら、緩まないようにワラの束を半分ずつに分け、縄を縛う要領で縛う。



10 作業着やエプロンのヒモなどに下げて、下側に火をつけて燻らせる。



9 タオル全体が隠れるように草の株元を揃えながら周囲を覆う。稲わらで株元をきつく縛れば完成。



8 青草を選ぶ。葉が広がっているヨモギやヤマオ(カラムシ)などが良い。土がついている根元は切る。



7 最後は結び止めをする。布は必ず木綿。化繊が入った布では、途中で火が消えてしまう。



6 腰に下げる長さが必要なため、わらが足りなくなったら1, 2本つき足して縛っていく。

心で社会を変える

一橋大学社会学部 2 年生
小山 栞奈



昨年の夏に、草刈りのボランティアとして初めてちんじゅの森サロン「ほぐほぐ」を訪れました。久しぶりに土に触れる経験をし、自分たちの手を加えて作られた建物、スタッフのお話に心が動かされ、その後も足を運ぶようになりました。ちんじゅの森での活動を通して自分の考えが形成されていくのを感じ「より深く活動に関わりたい!」という思いからスタッフになることにしました。

コロナ禍で時間にゆとりができ、自分の人生について考えるうちに「自分一人の力で何ができるのか、何もできないなら生きる意味などあるのか」と思い悩んでいました。そのときまたま何かの記事で目にした「生物にとって究極の使命は生きること」という言葉にはっとしました。生きる目的に悩む前に、自分を生かすために何をすべきかを考えなければいけないと気付いたからです。私たちは、日々仕事、勉強、趣味など様々な活動をしていますが、食べることは特別です。それは、食べるという行為は生きる目的であると同時に、生きるための手段だからです。現代の日本において多くの食べ物には、栽培・飼育、加工、流通、販売…と実に多くの人に関わっていますが、それを口にする張本人である私たちはその工程のほとんどを知りません。自分の体を作るはずの食べ物がどのように作られているのか知らず、出来上がったものを口にするだけの食事に、気味の悪さと同時に情けなさを感じました。

ほぐほぐで炎天下畑の手入れをしたり、腰がバキバキになりながら鍬で田起こしをしたりと、自分の手で稲や野菜を育てる経験を通して、食べるものを自分の手で作ることの苦勞を身をもって感じました。今なら「もし実らなかったらスーパーで買えばなんとかなるか」で済まされますが、自給によって生きてきた昔の人たちはそうはいかず、1年間の食べ物つまり1年間の命をかけて食べものを作ってきたのだと思います。実はちんじゅの森に関わったばかりのときは、ちんじゅの森の理念や考え方に出てくる、生きる、食べる、田畑、自然、神、先人という言葉が自分の中でつながっていませんでした。ですが次第に「生きるために食べ、食べるために田畑や自然と向き合い、収穫を神に祈り感謝を捧げる、という私たちが忘れてしまったことを私たち日本人のご先祖さまは実践してきたのだ」と気付きました。農や食に関心をもつようになって以降、開墾のための過度な森林伐採、輸送、加工過程での環境への負担や安全性の問題、孤食など、

現代の農と食の現実を突きつけられました。ですがその度に、日本の先人たちの暮らしがこれらを解決するための手がかりを与えてくれることを思い返し、心強く感じるとともに、日本人として誇りに思います。余談ながら、私は自分の名前がとても好きなのですが、栞奈(かんな)の「奈」は日本の古都、奈良に由来しています。グローバル化する社会の中で日本人としての誇りを持って生きて欲しい、という思いを込めて両親がつけてくれました。ご先祖様たちの暮らしを単なる古き良き伝統として捉えるだけではなく、次の時代のヒントとして学び、栞奈の名前にふさわしくそれを世界に・後世に伝える役割を果たしていきたいと思っています。

議論の場で誰かの意見に反対すると、「じゃあ代わりの案を出しなさい」と言われることがありますが、今の社会にも同じことが言えるのではないかと感じています。というのも、人間が幅を利かせる社会の限界が各方面で指摘されるようになり、社会を変える必要性を訴えかけてくれる取り組み・組織・人もたくさん存在するようになったおかげで「今のままの社会で良いのか?」と疑問を感じる人も増えてきた一方、今の社会に代わる社会や変わっていくための方法をイメージできず悶々としている人も多いと思うからです。恥ずかしながら私自身も、今のよう人間中心の社会はすぐに限界が来る、と思いつつも、便利で快適な生活を犠牲にしてまで自分の生活を実際に変えたことはほとんどありませんでした。宿題と同じで、頭では分かっているのに誰かにやりなさいと言われて仕方なくやっているうちは、行動に移して継続していくことは難しいのだと思います。ですがちんじゅの森の活動で、映像を通してちんじゅの森コンサートの歌と楽器の音色に胸を打たれたこと、ほぐほぐの畑作業でへとへとになった後の梅ジュースが美味しかったこと、代掻きのとき田んぼで子供たちが泥まみれではしゃいでいたこと…頭より先に心が動く、そんな瞬間をたくさん経験してきました。だから今の私は義務感からではなく、今と同じ

快適さや便利さがない暮らしを心から受け入れることができます。ちんじゅの森での活動を通して、論理的に今の社会の問題を説くことよりも、楽しい、美味しい、美しいことに触れて心が動く、そんな代替案を示すことで

「なんだ、意外とこっちの方が良いじゃん」と心から感じてもらうためのきっかけを作れるような人になる、という方向性を見つけることができました。



ちんじゅの森をとおして 伝えたいこと

寺村 佳子



ちんじゅの森のスタッフとして私が提案した企画には、「和のこころ」の講座や藍染めの講座などがあります。季節を愛しみ、ご先祖様も大切に想い暮らしてきた日本人の自然観や死生観、何を祈り、暮らしてきたのか…。「和のこころ」の講座では、日本人でありながら知らないことを、なじみのある四季折々の年中行事から紐解き、日々暮らしてゆく上で忘れかけている大切なものに気づききっかけとなるような講座にしたいと企画いたしました。



前回の講座は「立夏の巻」として端午の節句や田植えについてお話いただきました。ちんじゅの森サロン「ほぐほぐ」には、規模は小さいながらも田んぼや畑もあります。講座の“知識”だけではなく、実際に野菜やお米が育つ様子を自分の目で見て、土の感触を手で感じ、大地に足を踏みしめ、吹く風に季節を感じていただけるよう、また家でもうつりゆく季節を暮らしに取り入れ、普段何気なく過ごしている日常の景色が少しでも変わってくるよう工夫しました。

また講義の後の第二部では、鳥取県八頭町の志子部集落の皆さんにオンラインでご参加いただき、山の笹で作る笹巻きの話や、大きな窯に5円玉を入れて湯を沸かし、形代(かたしろ)の紙を焼くことで厄を祓い無事に過ごせるよう祈る、祓いの行事について写真を交えてお話いただきました。私たちも集落の集まりに参加しているような和やかな雰囲気の良い時間となりました。



集落の皆さんからは「笹巻き」の話から“時期になったら笹巻きを送ります”と仰っていただき、毎年開催の梅干しづくりに梅を送ってくださる方には、昨年漬けた冷凍完熟梅のシロップを“溶けるのを楽しんで味わって”というメッセージと共に送っていただき、顔の見える温かなつながりを感じました。

志子部集落の皆さんは、講師の辻川さんのお話や東京の会場の参加者の感想を聞くことによって、「志子部集落で行っている季節の行事ももっと心して行いたい」と仰られ、東京で暮らす私たちの声をお伝えすることで、各地域の行事を改めて見直すきっかけになると嬉しいと思いました。豊かな自

然が身近にある暮らしがいかに心豊かな生活であるのか、里山と離れた生活をしている東京での暮らしから感じることを伝えることも大切な役目であると感じました。講座参加者からは、“和の心から現代社会の課題までつなげた幅広く深い内容で、リアルとオンラインとミックスも大変よかった”などの声もいただきました。

次回、和のこころ講座は「立秋の巻」です。「お盆」をテーマにお話を伺い、第二部では志子部集落だけでなく、新潟村上市高根集落の皆さんと、それぞれの地域に伝わるご先祖様をお迎えする心温まる「お盆の風習」について写真を交えてお話を伺う予定です。

「藍染め」は、ちんじゅの森サロン「ほぐほぐ」で育てた藍で藍染めができたら素敵だなと思い、一昨年はたくさんの方々とストールを藍の生葉で染めました。昨年は新型コロナウイルスにより開催できなかったのですが、薬剤を使用せずに綿を染めることができるか主にスタッフで試してみたところ、絹よりも淡い綺麗な空色に染めることができました。今年は少人数でも行いたいと思い、藍を育てております。



草木染めについて「衣服は大葉なり」ともいわれ、昔の人は草木の薬効を染め、肌に取り入れていたそうです。たしかに自然の恵みをたくさん吸収した衣類を纏うことで、自然とつながっている感覚に戻れるのではないかと感じます。

広大で豊かな自然とはかけ離れた都市であっても、感じる心があれば、こころ豊かに暮らせるのではないかと、一人ひとりが今までの生き方を見直すことにより、それが大きな流れとなり、ひいては地球環境の改善へつながるのではないかと思います。ちんじゅの森サロン「ほぐほぐ」は都内でありながらも、小鳥がさえずり、小さな可愛らしいお花が咲き、虫や蝶など小さな生き物にも出逢えるのどかな場所です。普段の慌ただしい生活から非日常を味わうことができる貴重な場所と感じております。人として本来もっている感覚を取り戻し、自分自身を見つめ、いろいろな世代の方と集い、過去から学び、どんなことを大切にしたいと思うのか、それぞれが次の世代へつないでゆきたいことを考え、これからの生き方を見直すきっかけとなるような「場」でありたいと思っています。

私自身も拠点ができたことにより、日々新たな発見がたくさんあります。みなさんとこのちんじゅの森を豊かで楽しい森となるよう一緒につくってゆきたいと思っていますので、みなさま今後ともよろしく願いいたします。

スタッフの松田重雄です。

最近のNPOちんじゅの森での活動は、めっぽうデジタル部門を担当しています。

これまでのイベントやワークショップでは同じ場所にみなさんで集って賑やかに行っていましたが、昨今の状況でそういうわけにはいけなくなりました。

そこで僕たちも「オンライン」という流行りの？技術をつかってイベントを行っています。僕自身、ライスワーク（ご飯を食べるための稼ぎを作る仕事）で放送関係の機材を扱っているため、このジャンルは得意でした。これまでのテレビやラジオでは特別な回線や衛星での中継が必要でしたが、インターネットの発展によって個人レベルでも行えるようになってきました。iPhoneが発売されてから、たかだか10年ほどにもかかわらず、ものすごいスピードの進化ですね。さらに、コロナ禍にあって「オンライン」「リモート」が急速に広まりました。第4次産業革命の真っ只中です。

この1年、「技術」とは必要に迫られれば否応なく広がるものだと強く感じさせられました。きっと世界中の人が工夫したり協力したりして困難な状況を乗り越えようとしているから、こんなスピードで進化していくんだと思います。「やれば、できる」と言っている芸人さんもいますが、本当にその通りだと思いました。

オンラインは
はじめました。

松田重雄



▲ スタジオのような設備



▲ カメラを駆使する奈々子さん



そんなオンライン講座でもNPOちんじゅの森で扱ったのは「和のこころ」。来場いただいた方から講座の題材とスタジオのような設備がアンマッチでおもしろいとコメントいただきました。オンラインの良さはなんといっても距離を超えて対話ができるというところ。 「風土まるごと旬を味わう手しごと講座」と名付けた、ご縁のある地域の方に出演いただいて対話しながら地域の紹介をしたり、参加いただく方が自宅にいながら季節の手仕事を一緒にやるワークショップなどは、この技術があってこそです。

ただ、それをお伝えするにも工夫が必要です。

オンライン配信するにも、定点のカメラで動きのない映像だと参加してくださる方もわかりずらかったり疲れてしまうので、動きのある映像で変化をつけるように複数台カメラやマイクを使っています。これらの操作は僕ひとりではできないので、カメラマンとして準スタッフの奈々子さん（僕の妻）に協力してもらい、みなさまに楽しんでもらえるよう工夫しています。また、奈々子さんにはカメラマン以外にも背景になるセットのしつらえもお願いしています。インテリアショップで働いた経験を活かして、イベント内容や季節に合わせて毎回趣向を凝らしているため、ご参加いただける方はぜひ背景の部分も見てもらえたらうれしいです。



▲ 節分の背景セット
(お面と糰と鯛とお豆)

オンラインの裏話ばかりになってしまいましたが、NPOちんじゅの森がお伝えしたいことは変わらず、日本の「多様ですばらしい文化」です。

気候も習慣もまったく異なる縦に長い日本列島で1万年以上も続いてきているのだから当然かもしれません。理由はわからないけど、美しい、心地いいと感じてしまえることがあります。きっと先人たちも同じように感じたから伝え残してきてくれたんだと思います。技術が進歩したとて、そんな感性は伝えて残していかないと。僕らも日本文化を担っているんだから。そんなことを考えながらNPOちんじゅの森の活動に参加しています。ぜひ一緒に参加してください。

田んぼと畑 @ほぐほぐ

「ほぐほぐ」をオープンして二年。田んぼの作業や旬の野菜作りに取り組み、季節の手仕事として顔の見える各地の作り手さんにつながって保存食を作るなど、「作物」の背景とつながり、暦を大切に年中行事の活動をしてきました。天候によって実りが左右される農作物を今年も実らせてほしいと、太陽、風、雨、土…自然の働きに神さまを感じ祈ってきた先人たち。自然の恵みによって、私たちは今も変わらず生きていく根っこの「食事」をつくり出すことができます。これからも身体と五感をつかって生きてきた、日本人の生き方の原点を思い出せるよう活動してまいります。



この春からは種から野菜をつくってみよう！と関心ある方に集まってもらい、きゅうりやナスやミニトマトを育てています。残念ながら緊急事態宣言下となり、田植えはスタッフのみとなりましたが、田んぼの代かきでは土をやわらかくして平らに整える作業をみんなで行いました。今年の稲がどのように実ってくれるか、秋の収穫も楽しみです。

4 / 18 sun
代かき



代かきは、田んぼの土が細かくやわらかくなるよう丁寧にかきまぜて、最後に土の表面を平らにする作業です。広い田んぼでは機械が活躍する仕事ですが、小さな田んぼでは人力です。小さな子どもたち



が田んぼを歩き回って土をやわらかくし、最後は大学生が表面を整えて、美しい田んぼにしてくれました。

残念ながら緊急事態宣言下の東京。スタッフのみで静かにお田植です。ご神事で今年も稲が順調に育っていくようお祈りし、田んぼでは光合成できるように苗をあまり沈めすぎないように植え付けていきました。小さな苗はぐんぐん成長し、ひと月半で50cmほどの背丈に。



5 / 3 tue 祝日
田植え

4 5 5 / 24 16 23 sat sun sun
畑

種の発芽は嬉しいものです。野菜同士も相性があるらしく、ミニトマトとバジル、ナスとパセリ、ナスと落花生をコンパニオンプランツしています。種をまく時期が遅かったか、これからどんな変化を見せながら育つかどうか、観察中です。





ちんじゅの森サロン
ほぐほぐ
 HOGU HOGU
 イベントスケジュール

2021年
 7月～8月

7/17
 sat

草木染め～藍の生葉染め

▶オンライン開催 無

ちんじゅの森サロン「ほぐほぐ」で育てた藍で「藍の生葉染め」を行います。日本人の暮らしと古くから関わりのある藍染め。実際に藍の葉を自らの手で摘み、一緒に染めてみませんか。

※天候によって変更もあります。葉の育成状況によっては、8月にも行います。

8/7
 sat

14:00
 ▼
 16:00

「和のこころ～季節を楽しむ～」《立秋の巻》

講師 辻川 牧子さん

▶オンライン開催 有

四季折々の年中行事やしきたりに込められた日本人の自然観や想いに触れるひととき
 講師の辻川牧子さんより「お盆」についてお話しいただいた後に、鳥取県八頭町志子部集落と新潟県村上市高根集落とつなぎ、それぞれの地域で行われているお盆の風習についてご紹介いただきます。

8/8
 sun

夏野菜をいただきます！【一緒につくろう！季節の野菜〈夏〉】

講師 サゴイシオリさん

▶オンライン開催 無

種から苗を育て実をつけるのを楽しみにしてきた夏野菜。収穫してお供えて調理していただきます！

※作物の実りの状況により変更もあります。

8/22
 sun

豊作を祈る夏祭り【お米の一年、体感しよう！】

出演 三橋 とらさん

▶オンライン開催 無

田んぼの稲が台風や大雨や強風からも守られるよう夏祭りを開催！五穀豊穡を祈る「虫送り」を線香花火で行います。紙芝居師とらちゃんの紙芝居や梅シロップのかき氷もどうぞお楽しみに！暑さが和らぐ黄昏時から始まります。

8/29
 sun

“乾物は未来食”今日からはじめる干し野菜

講師 小笠原 真紀子さん

▶オンライン開催 無

お日さまの力で干すだけのシンプルな干し野菜は、フードロスの削減、生ごみの軽減、常温保管で冷蔵庫いらず。自分の食卓から社会貢献につながる食材です！座学プラス実演でランチタイム。少人数リアル講座で開催します。

※新型コロナウイルス感染症の状況により開催を見合わせる可能性もございます。

日程と詳細はHPとSNSでお知らせいたします。ご確認ください！
 お問い合わせはちんじゅの森事務局まで。



フォロー&チェックお願いします！



webURL : chinju-no-mori.or.jp

〈ちんじゅの森事務局〉

TEL ▶ 03-6877-0425

Mail ▶ hoguhogu@chinju-no-mori.or.jp

ほぐほぐ文庫のすゝめ

ほぐほぐのある文京区目白台は「台」の字がつく通りの高台になっている。風の通りが快適で陽射しも心地よく植物がよく育つ。南側は急に落ち込んでいて胸突坂（おなつきざか）と名の付いた急な坂をくだった先には水神社が建ち、その前を神田川が流れている。西に「雑司が谷（ぞうしがや）」、東に「茗荷谷（みょうがだに）」、台地と谷が入り組んだ地形だ。隣りの台地「小日向（こひなた）」には山手線の駅名にもなっている「大塚」の由来、大きな塚（古墳）があったらしい。目白台の氏神様は神田川沿いにある「高田氷川神社」。そこから長く伸びる富士見坂。以前は富士山がまっすぐ先に見えたのだろうが今は建物で見えない。近所を散歩する機会が多い最近、縄文から江戸に続く生活を妄想して歩いていると楽しくなってなかなか帰れない。



「アースダイバー」 著者：中沢新一 出版：講談社

前置きが長くなりましたが、ご紹介したい本は「アースダイバー」。

一作目は2005年、二作目は2012年の大阪編、三作目は2017年の東京の聖地編、そして2021年4月に新作、神社編が出版されました。

「地形から見る文化」のおもしろさを教えてくれた本です。

ちなみに弥生時代の弥生とは文京区弥生町（今の東京大学構内）で見つかった土器を弥生式と呼んだことに由来していると最近になって知りました。

《松田 重雄》

information

キツネラジオ

毎週月曜日 AM9:00 配信



あらゆる価値観の転機が訪れようとしている今、本当の豊かさとは何か、幸せとは何か…ちんじゅの森 前代表 中尾伊早子さんのYouTubeラジオが始まっています♪

Vol.5～はちんじゅの森理事 / 澁澤壽一さんとの対談です。心に問いかけるひと時。ぜひお聞きください！



QRコードを読み取ると
youtubeにアクセスできます。

キツネラジオ

【令和2年度 特定非営利活動法人ちんじゅの森通常総会のご報告】

2021年5月29日に令和2年度 特定非営利活動法人ちんじゅの森通常総会を書面総会にて行いました。

正会員数92名中、62名(本人出席5名、議決権行使書57名)の出席を得て、総会定足数の5分の1を満し、以下の審議事項について満場一致で承認されました。

- (1) 第一号議案 令和2年度事業報告・令和2年度決算報告
- (2) 第二号議案 令和3年度事業計画・予算

ご協力に厚く御礼申し上げます。令和3年度も何卒よろしくお願いいたします。

ちんじゅの森 サポーター募集！

NPO法人ちんじゅの森の活動は会員の皆さまからの会費と寄付で運営しております。活動の趣旨に賛同してくださる方はぜひ会員になって、活動へのご支援をお願いいたします。会費は年間一口2,000円です。ご寄付に規定はございません。

【郵便振替】口座番号 00100-5-29217 特定非営利活動法人ちんじゅの森

【三菱 UFJ 銀行】恵比寿支店 普通 1318980 特定非営利活動法人ちんじゅの森

●はじめて会費や寄付にご協力くださる皆様へ

銀行口座をご利用された場合、ご連絡先確認のため、事務局へご一報くださいますようお願いいたします。

TEL ▶ 03-6877-0425 (平日10:00～16:00) Mail ▶ hoguhogu@chinju-no-mori.or.jp